

蒼洋の城塞4

ソロモンの堅陣

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地図・図版 安達裕章
編集協力 らいとすたつふ

目次

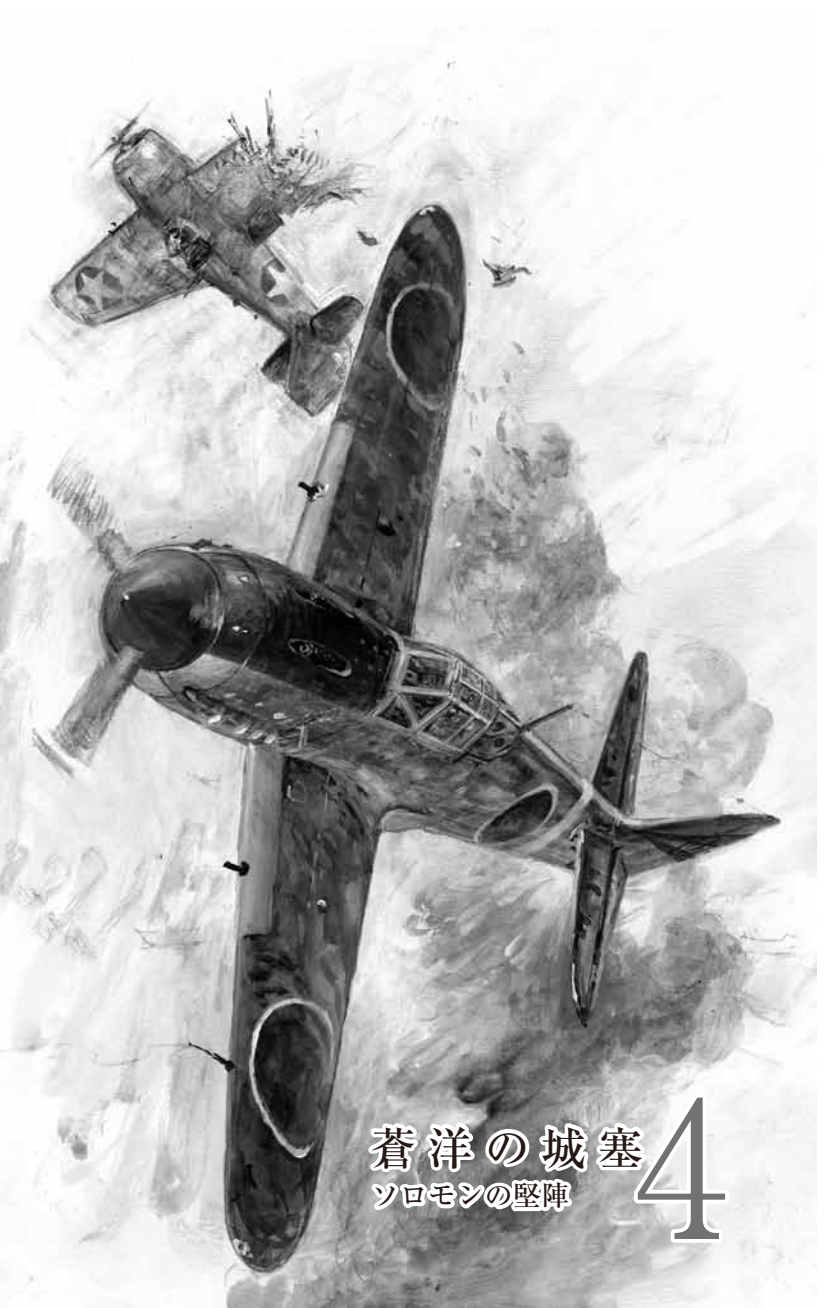
第一章	モレスビー脱出	9
第二章	陸鷺飛翔	49
第三章	F6F急襲	83
第四章	第四次珊瑚海海戦	125
第五章	月下の追跡者	185
第六章	引きゆく潮	233



珊瑚海周辺図

10°N





蒼洋の城塞
ソロモンの堅陣

4

第一章 モレスビー脱出

1

第九戦隊旗艦「北上」の左舷後方から、強い光が届いた。

一箇所だけではない。新たな光源が、次々と出現している。

「モレスビーが燃えている……」

誰かの声が、司令官岸福治少将の耳に届いた。

ポート・モレスビー——今年五月一二日以来、日本軍の占領下にあったニューギニア南東部の要地に炎上しているのだ。

数十秒の時を経て、炸裂音が届く。

日本軍が、半年以上に亘って守り通してきたモレスビーの飛行場や防御陣地、市街地が、爆弾によって破壊される音だった。

「北上」は、動きを止めることはない。

夜の海面を白く切り裂きながら、モレスビーより

遠ざかりつつある。

「護衛部隊から連絡は？」

「『針路前方二敵影ナシ』と伝えております」

「いいだろう」

通信参謀岡本功少佐の答を聞き、岸は頷いた。

「守備隊将兵は、窮屈な思いをしているでしょうな」

「命がけの避退だ。我慢して貰う以外にあるまい」

首席参謀二反田三郎中佐の言葉に、岸はむつりと答えた。

ポート・モレスビーは、日米攻防の焦点となつて来た地だ。

昭和一七年八月に、同地に進出した第二一航空艦隊隷下の航空部隊は、連日のようにタウンズビルの敵飛行場や、豪州本土に物資を輸送する米国の輸送船団に攻撃を加えたが、米軍もまた、四発重爆撃機ボーイングB17 フライング・フォートレスによる爆撃をモレスビーに加えると共に、潜水艦や

水上部隊によつて、モレスビーに物資を運ぶ輸送船団を攻撃した。

激しい攻防戦の中、多数の輸送船と膨大な量の補給物資が珊瑚海に沈み、基地航空部隊やモレスビーの守備隊も消耗を重ね、疲弊した。

この状況下、米軍がソロモン諸島のガダルカナル島に上陸し、ニューブリテン島のラバウルを脅かし始めた。

ラバウルは、モレスビーの後方支援基地の役割を果たしており、物資輸送の中継点となっている。

そのラバウルが陥落するような事態になれば、モレスビーは立ち枯れとなる。

大本営はここに至り、

「モレスビーより全守備隊将兵を撤退させる。作戦実施日は、昭和一七年二月三一日とする」と決定した。

モレスビーよりもラバウルに近く、補給も比較的容易なラビ——ニューギニア東端付近に建設された

新たな航空基地を、珊瑚海における航空戦の要とするのだ。

部隊の撤収を担当する第八艦隊司令部では、足の速い巡洋艦、駆逐艦に守備隊将兵を乗せ、全員を一挙に輸送する計画を立て、軽巡三隻、駆逐艦一一隻から成る輸送部隊が編制された。

第九戦隊は、第三次珊瑚海海戦の終了直後に第八艦隊の指揮下に入り、岸司令官には輸送部隊の指揮を執るよう命じられた。

護衛として、第六戦隊の重巡四隻と、第一一、一二駆逐隊が付く。

今年八月の時点で、モレスビーを守っていた将兵は、第二五、二六航空戦隊、第九根拠地隊、佐世保鎮守府第五特別陸戦隊、第一三設営隊、そして陸軍第三八師団を合わせ、約一万九〇〇〇名。

八月から一二月までの間に、モレスビーに送られた増援部隊は、約五〇〇〇名。

輸送部隊は、収容人数を一万二二六四名と報告し

ているから、戦死者数は約一万二〇〇〇名。二人に一人が戦死したことになる。

一つの拠点における損耗率は、開戦以来最大だ。

それでも、半数の兵を脱出させ得たことは、不幸中の幸いと言える。

軽巡にせよ、駆逐艦にせよ、輸送任務のために建造されたわけではない。一万二〇〇〇名余りの将兵にとつては、さぞ窮屈だろうが、どうか堪えてくれ——と、岸は胸中で手を合わせた。

モレスビーは、炎上を続けている。

左後方には、篝火を思わせる光が見えていたが、モレスビーから遠ざかるにつれて小さくなり、やがて闇の中に溶け込むように消えた。

2

出港後、しばらくは平穏な航海が続いた。

護衛部隊は輸送部隊を先導し、一八ノットの速力

で夜の海面を進んでいる。

前方では、第一一駆逐隊の「吹雪」「白雪」「初雪」と第二二駆逐隊の「叢雲」「東雲」「白雲」が傘形の陣形を作つて敵潜水艦の襲撃に備え、その後方に第六戦隊の重巡四隻が単縦陣を作っている。

輸送部隊は、六戦隊の後方だ。

これまで、モレスビーへの物資輸送には、ルイジアード諸島東部のジョマード水道が使用されていたが、今回の作戦では、同諸島西端のサマライ島とニューギニア島を分かちチャイナ水道を通ることになっている。

現海面から同水道の入り口までは、約一一〇哩。一八ノットで六時間強だ。

敵潜水艦の襲撃は言うに及ばず、水上部隊による攻撃の可能性も考えられる。

夜が明ければ、空襲の危険が加わる。

護衛部隊の重巡、駆逐艦はまだしも、輸送部隊の一四隻は一万二六四名の将兵を収容しているため、

船足が鈍い。

にも関わらず、司令官五藤存知中将は強気だった。「相手が何であれ、輸送部隊には指一本触れさせぬ。連合艦隊も、第八艦隊も、そのつもりで六戦隊に護衛を委ねたはずだ」

と、自身に言い聞かせた。

第六戦隊は、モレスビーを巡る一連の戦いで武勲を立てた部隊だ。

第一次珊瑚海海戦では、第五戦隊の重巡「妙高」「羽黒」と協同して、敵巡洋艦二隻撃沈、三隻撃破の戦果を上げた。

七月一五日の第一次ポート・モレスビー沖海戦では、第三水雷戦隊と協同して、敵巡洋艦三隻、駆逐艦一隻を撃沈した。

第六戦隊を編制する青葉型、古鷹型は、妙高型以降の重巡に比べて攻撃力が小さい。総合火力では、妙高型の半分程度に過ぎない。

その弱点をもとめず、六戦隊は強力な米艦隊

を向こうに回し、戦果を上げて来たのだ。

それら二つの海戦以外にも、船団の護衛任務中に敵潜水艦の襲撃を受けたり、モレスビー入泊中に空襲を受けたりしたことがあるが、全てを無事に切り抜けて来た。

将兵の間では「不死身戦隊」と呼ばれるほどだ。

第八艦隊司令部が、第六戦隊に護衛を命じたのは、その武勲と強運を評価したためであろう。

五藤はこの十一月、中将に昇進した身だ。この作戦終了後は、戦艦部隊である第一二戦隊の司令官に任ずる旨、内示を受けている。

第六戦隊司令官としての最後の任務だ。「不死身戦隊」の指揮官として、花道を飾らせて貰う——と、五藤は心中に期していた。

○時五一分（現地時間一時五二分）、
「逆探、感あり。波長一〇センチ。発信間隔一秒ないし二秒。複数の艦から発せられている模様」
第六戦隊の先頭をゆく旗艦「青葉」の艦橋に、

通信室からの報告が上げられた。

「来たな」

五藤は首席参謀貴島掬徳中佐と山森艦長に頷いて見せ、大音声で矢継ぎ早に命令を下した。

「合戦準備。夜戦に備え！」

「六戦隊全艦、観測機発進！」

「青葉」から各艦に信号が送られ、

「観測機発進！」

一一月の定期人事異動で「青葉」艦長に就任した山森亀之助大佐が、飛行長滝山直樹中尉に命じる。若干の間を置いて、艦載機の射出音が響き、爆音が聞こえ始める。

開戦時、六戦隊の各艦が搭載していたのは、旧式の九四式水上偵察機だったが、現在は零式水上偵察機に代わっている。

各艦から二機ずつ放たれた水偵が、三菱「金星」四三型エンジンの爆音を高らかに響かせ、夜空に舞い上がってゆく。

「年明け早々の海戦ですか」

貴島が苦笑した。

新しい年は一時間前に明けたばかりだが、正月気分は全くない。戦闘を目前に控えた緊張が、艦を支配している。

「新年の挨拶はラビで聞かさ」

五藤が肩を軽くそびやかしたとき、右前方の海面に発射炎が閃いた。

「来た！」

貴島が叫んだ。

第一次、第三次珊瑚海海戦と同じだ。米艦隊は電探が映し出した影を目標に、砲撃を開始したのだ。

「護衛部隊、右砲雷戦！」

「輸送部隊、針路七五度！」

五藤が新たな指示を送り、

「輸送部隊、順次取舵。七五度に変針します！」

後部見張員が報告を上げる。

「敵は巡洋艦五、駆逐艦の数は不明！」

「四対五か」

艦橋見張員の報告を受け、五藤は呟いた。

実際の戦力差は、より大きい。敵の巡洋艦が全て重巡である場合、主砲は二〇センチ砲九門。六戦隊各艦の主砲は二〇センチ砲連装三基六門だから、一隻当たりの砲火力は日本側の五割増しだ。

こと主砲に関する限り、敵は二倍近い火力を有することになる。

敵弾が唸りを上げて飛来し、「青葉」の前方に落下する。奔騰する水柱が前方の視界を遮り、しばし駆逐艦の姿を隠す。

闇の向こうに、新たな閃光がほとばしる。光の中に、敵の艦影が浮かび上がる。

「砲術より艦長。敵は右三〇度、一二〇（二万二〇〇メートル）！」

射撃指揮所から、報告が届く。

日本側は、まだ一発も撃っていない。四隻の重巡も、六隻の駆逐艦も、沈黙を保っている。

「護衛部隊突撃せよ。最大戦速！」

五藤は、敵弾の飛翔音に負けぬほどの大声で下令した。

距離を詰め、切り札の雷撃を見舞うのだ。

「一二駆、一二駆の隊形が乱れたままです」

「構わん。このまま突っ込め！」

水雷参謀南祝少佐が注意を喚起したが、五藤は一蹴した。

既に敵の砲撃を受けている以上、隊列を整えている余裕はない。

「艦長より機関長。両舷前進全速！」

山森が、機関長磯部太郎中佐に命じた。

機関の唸りが高まり、「青葉」が加速される。

前方では、六隻の駆逐艦が突撃を開始し、後部からは『加古』『古鷹』『衣笠』増速！の報告が伝えられる。

敵の第二射弾が飛来する。多数の水柱が海面に奔騰し、しばし味方駆逐艦の姿を隠す。

水柱の太さ、高さには、大小二種類があるようだ。敵は、重巡と軽巡の混成かもしれない。

敵が第三射を放った直後、右前方上空に青白い光源が出現し、敵の艦影をうつすらと浮かび上がった。

「観測機より受信。『敵針路二七〇度』！」

通信室が、新たな報告を上げる。

敵は、反航戦の態勢を取っているのだ。

「目標、右反航の敵。砲撃始め！」

「目標、敵一番艦。砲撃始め！」

五藤の命令を受け、山森が射撃指揮所に下令した。

既に測的を終えていたのだから、「青葉」の第一、

第二砲塔が、砲口に発射炎を閃かせる。

各砲塔一門ずつの交互撃ち方ではなく、一斉撃ち方だ。

現在、敵を射界に捉えているのは、前部の第一、第二砲塔だけであり、交互撃ち方では一度に二発しか発射できない。

砲術長遠藤孝志中佐は、交互撃ち方では直撃弾を得るまでに時間がかかると考え、最初からの斉射を用いたのだろう。

敵の第三射弾が唸りを上げて飛来し、複数の敵弾が、「青葉」の右舷至近に落下した。

手を伸ばせば届きそうなほど近くに、夜目にも白い水柱が奔騰し、爆圧が連続して「青葉」の艦底部を突き上げた。

前方に展開する駆逐艦も、砲撃に踏み切っている。各艦の艦橋や煙突が、前甲板に閃いた発射炎によって浮かび上がり、「青葉」の艦上に砲声が届く。

「加古」撃ち方始めました。「古鷹」「衣笠」撃ち方始めました！」

後部見張員が報告を上げたとき、右前方の海面に新たな発射炎が閃いた。

距離が詰まったためだろう、閃光の中に浮かび上がる敵の艦影が拡大している。

「司令官、雷撃はいかがなさいますか？」

「まだだ。もう少し近づく」

南水雷参謀の問いに、五藤は即答した。

強力無比の九三式六一センチ魚雷も、遠距離から発射したのでは、命中は望めない。

確実を期すには、充分距離を詰めることだ。

「用意……だんちやーく!」

砲撃後の経過時間を測っていた榎八郎上等水兵が報告する。

五藤は敵艦隊を注視するが、何も起こらない。「青

葉」の第一射は、空振りに終わったのだ。

「初弾命中は望めぬか」

山森が、失望を隠せぬ様子で溜息をついた。

新しい「青葉」艦長は、海軍砲術学校教頭という前歴の持ち主だ。それだけに、初弾からの直撃を期待したのかもしれない。

「青葉」が第二射を放つ。

四門の砲口から火焰がほとばしり、強烈な砲声^{きやうれつ}が耳^{みみ}を打つ。発射の反動を受けた鋼鉄製の艦体^{かんたい}が

震える。

入れ替わるように、敵の第四射弾が飛来する。

弾着の瞬間、「青葉」の右前方に閃光が走った。

第一一駆逐隊の三番艦「初雪」が、後部から炎を噴き上げ、艦影を赤々と浮かび上がらせている。

機関部に被害を受けたのか、前をゆく一一駆の「吹雪」「白雪」との距離がみるみる開いてゆく。

「青葉」が燃え盛る「初雪」の左脇を通過したとき、艦の様子が見て取れた。

「初雪」の艦尾で炎が躍り、大量の黒煙が周囲の海面に拡がりつつある。速力は大幅に低下し、今にも行き足が止まりそうだ。

炎上する「初雪」が視界の外に消えたとき、榎一水が「だんちやーく!」と報告した。

直後、右前方の海面に閃光が走った。

橙色の光が揺らめき、敵の艦影が浮かび上がった。

「よし!」

「うむ！」

山森が歓喜の声を上げ、五藤も満足感を覚えて頷いた。

「青葉」は、第二射で直撃弾を得たのだ。

「青葉」の主砲が、この日三度目の咆哮を上げる。

第一、第二砲塔四門の二〇センチ主砲から放たれた射弾が、火災を起こした敵艦目がけて飛翔する。

直後、敵の隊列の中で、連続して発射炎がほとばしり始めた。

およそ六秒から七秒置きに閃光が走り、敵艦の姿がくつきりと浮かび上がる。

敵弾は唸りを上げて飛来し、「青葉」や先行する駆逐艦五隻の周囲に、続けざまに水柱を噴き上げる。

「何だ、いったい!」

「司令官、敵軽巡の連続斉射です!」

五藤の叫び声を受け、山森が血相を変えて叫んだ。

五藤は、一瞬で状況を悟った。

軽巡や駆逐艦の主砲は、口径が小さく、砲弾も軽

いため、装填時間が短い。ひとたび連続斉射に踏み切れば、短時間で多数の砲弾を叩き付けることができる。

一月四日の第三次珊瑚海海戦では、第三戦隊の戦艦「榛名」が英軍の軽巡三隻から連続斉射を浴びせられ、大きな損害を受けている。

米艦隊の指揮官は、なかなか直撃弾を得られないことに業を煮やし、一か八かの連続斉射に踏み切ったのだ。

「六戦隊各艦、目標を敵軽巡に変更!」

「艦長より砲術、目標、連続斉射中の敵軽巡!」

五藤が全艦に下令し、山森が遠藤砲術長に命じる。

「青葉」の主砲がしばし沈黙し、二〇秒ほどの間を置いてから砲撃を再開する。

その間にも、敵軽巡の一五・二センチ砲弾は次々と飛来する。

「青葉」や駆逐艦五隻の周囲に多数の水柱が奔騰し、至近弾の爆圧が艦底部を突き上げる。その狂騒が

収まるより早く、新たな敵弾が飛来する。

連続射撃の合間を縫うようにして、重巡の二〇センチ砲弾も飛んで来る。

軽巡の一五・二センチ砲弾ほど発射間隔は短くないが、一発当たりの破壊力は大きい。

「青葉」以下の四隻も、反撃する。

連続射撃を放っている軽巡を目標に、第一、第二砲塔の四門を発射し、二〇センチ砲弾を叩き込む。

だが、六戦隊の四隻が一射を放つ間に、敵軽巡は三度から四度の砲撃を浴びせて来る。

敵弾は間断なく飛来し、周囲の海面を激しく沸き返らせる。

直撃弾は出ないものの、至近弾による爆圧は、艦底部を連続して突き上げる。

「第二缶室に浸水！」

機部機関長が報告した直後、「青葉」の左舷前方に強烈な閃光が走った。

光は次の瞬間、巨大な火焰に変わり、おどろおど

ろしい炸裂音が「青葉」の艦橋に届いた。

「『東雲』轟沈！」

と、艦橋見張員が報告する。

第一二駆逐隊の二番艦「東雲」が、直撃弾を受けたのだ。爆発の規模から見て、艦中央部の魚雷発射管に被弾し、誘爆を起こした可能性が高い。

護衛部隊は、二隻目の駆逐艦を失ったのだ。

「敵との距離は!!」

「八〇（八〇〇〇メートル）！」

「よし、魚雷発射始め！」

南水雷参謀の返答を受け、五藤は断を下した。

このままでは、魚雷を発射する前に敵の砲撃で叩きのめされてしまう。発射管に直撃弾を受けるようなことがあれば、「東雲」の二の舞だ。

多少遠くても、雷撃に踏み切った方がよい。

「艦長より水雷、魚雷発射始め！」

敵弾の飛翔音、至近弾の炸裂音が間断なく響く中、山森が水雷指揮所に下令する。

若干の間を置いて、

「魚雷発射完了！」

水雷長石黒哲雄^{いしくろてつお}少佐が報告し、

「『加古』『古鷹』『衣笠』より信号。『我、魚雷発射完了』」

「『吹雪』『叢雲』より入電。一一駆、一二駆とも魚雷発射完了」

後部指揮所と通信室からも報告が上げられる。

六戦隊の各艦は九三式六一センチ魚雷四本、一一駆、一二駆の吹雪型駆逐艦は九〇式六一センチ魚雷九本。

酸素魚雷と空気魚雷を合わせて、五二本の魚雷が、砲撃を繰り返す敵艦目がけて放たれたのだ。

雷撃距離を考えれば、あまり高い命中率は望めない。一本でも命中すれば、上々^{じょうじょう}かもしれない。

だが、自分たちの任務は敵艦隊の撃滅^{げきめつ}ではなく、輸送部隊の護衛だ。敵を混乱^{おとし}に陥れ、輸送部隊に近寄せなければ、作戦目的は達成できる。

「青葉」以下の各艦は、砲撃を続ける。

反航によって相対位置^{そうたい}が変わったため、最初は沈黙を保っていた第三砲塔も、砲撃に加わっている。

砲撃のたび、砲声が艦橋を包み、他の音全てをかき消す。

敵軽巡は、なお連続斉射を続けており、「青葉」や駆逐艦四隻の周囲に、水柱が繰り返し奔騰する。

「一一駆、一二駆、七五度に変針！」

五藤は、新たな命令を発した。

防御力の弱い駆逐艦を、これ以上敵の砲火にさらすべきではない。敵巡洋艦の砲火は、六戦隊が引き受けるのだ。

四隻の駆逐艦が取舵を切った。

「青葉」の前方にまっすぐ伸びていた航跡が、大きな弧を描き、左方へと向かった。

直後、通信室から新たな報告が飛び込んだ。

「輸送部隊より受信。『我、敵ノ攻撃ヲ受ク』！」

「何だと!？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。